

Title	物価下落の徴候
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.2 (1913. 4) ,p.355(139)- 359(143)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130422-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

及び物價平準騰落の法則は本篇に於て説明せしが如き簡單なるものに非ずして、實は頗る複雑なり。されど本篇の目的は主として價格と物價平準との關係を論ずるに在るを以て、此兩者其物に就きては複雑なる説明を避け之を他日に譲るとせり。

雜 錄

物價下落の徴候

本篇はアシレイ教授の近業『金の産出と物價』(Gold and Prices)の末節の梗概なり。本書は倫敦市の Pall Mall Gazette 雜誌の依頼を受け著者が昨年五月二十一日、二十二日、二十五日、二十六日、二十八日及び二十九日の同誌紙上に寄稿せる六篇の論文を一小冊子に纏めて出版せるものなり。本書を分ちて緒言、第一節物價指數と卸相場、第二節食料品の小賣相場と製造品、第三節原因、第四節新たに産出せられたる金が物價に影響を及ぼすの順序、第五節社會に及ぼす影響、第六節將來に於ける物價の變動となす。左に其の梗概を譯出せるは即ち第六節なり。第一節乃至第五節

に於てアシレイ教授は物價が近來著しく騰貴せるは金産出の増加に因くものなるを指摘し次に物價騰貴が確定せる收入を有する者に損失を醸すものなるも利潤に依りて收入を計る者に對しては却つて利益となることを説き、最後に第六節に於て物價の前途に就き左の如く論述せられたり。

前述の如く、英國に於ける千八百九十六年より千九百十一年に至る迄の物價の騰貴は商品の卸相場を取れば二十四%、食料品の小賣相場を取れば、十九%なり。されど、此騰貴の一部分は千八百九十六年以後に始まりたる商業循環期(商業は常に一盛一衰しつゝあるものにして、或る大不景氣と次の大不景氣との間の期間を商業の循環期と名く。此期間には物價は漸次騰貴するの傾向を有し、遂に或る頂點に達し、其後間もなく大恐慌大不景氣起り、物價は暴落す。)に屬する好景氣の潮流の結果たらざるはあらず。貨

幣の増加より来る物價騰貴と此好景氣より生ずる物價騰貴とを分離する爲めに、ジェボンズ氏は曾て物價騰落史中の最低點を比較せしことありしが、吾人も此方法を用ひ、千九百〇五年を以て千九百年より千九百〇七年に至る迄の卸相場最低點とし、又千九百〇六年を以て千九百〇一年より千九百〇八年に至る迄の食料品の小賣相場の最低點と看做すべし。若し之を標準として計算せば、千九百〇八年迄に金の供給増加の爲めに卸相場は約一割、食料品の小賣相場は約一割二分騰貴せることとなるなり。飲食費は労働者の支出の約十二分の七に當るのみならず、千八百九十六年より千九百〇三年に至る期間に於ける生計費に關する政府の調査に據れば、飲食費は生計費全體を可成り忠實に代表するものなるを以て、生計費は金供給の増加の結果として一割乃至一割二分の騰貴を來したりと云ふも敢て過言に非ざるべし。

されど、金供給の増加は今後も猶ほ繼續すべきものなる乎。金産額は千八百九十二年——千八百九十九年間に三億圓より六億圓以上に激増せるのみならず、千九百〇三年——千九百〇九年間に於て再び六億圓より九億二千萬圓に上りたるも最近三年間に於ては其増加率は多少衰へ、千九百〇九年には九億二千萬圓、千九百十年には九億三千萬圓、千九百十一年には九億四千萬圓の産出を見たるのみなりき。若し金の産出の増加が此程度にて進むならば、物價に對する影響は尙ほ多少は持續せらるべきも、漸次衰退するの傾向を有するに至るべし。如何となれば、假令に累年の産出が同額なりとせば、物價に及ぼす累年の金額の影響は漸次減すべきものなればなり。加之、金産出が絶對的に減少するに至るが如きことなかるべしとは斷言するを得ざるなり。世界に於ける金産額の五分の二を産出する南阿トランスバールの産額を除外すれば、千九

百十一年の産額は事實千九百十年の産額よりも少かりしを見る。千九百九十年後に於ける金産額の増加は主として南阿、米國、濠洲に於ける増加の爲めなりしと雖も、米國の産額は千九百八年に一億九千餘萬圓に達したる後以來増加せず。西部濠洲の産額は千九百〇三年に其頂點に達し八千七百五十萬圓を算したりしが、爾來噸に減少して、千九百十年には六千二百五十萬圓に下り、又千九百十年の最初の十ヶ月間に於ける産額は一・二七・〇〇〇となりしに、千九百十一年の同期間には一・一三六・〇〇〇を産出せるに過ぎざりき。加之、産額が減少せると同時に、生産費が増加せるが如く思はる。如何となれば、金採鑛従業者一人當りの産額は千九百九年に於て四千三十圓なりしもの、千九百十年には三千八百六十圓に減じたるを以てなり。次に加奈太の産額は千八百九十五年に五百萬圓なりしに千九百〇年には一躍五千餘萬圓に上りたる

も、爾後噸に減少して二千萬圓程に下りたり。是れに由りて之を觀るに、金鑛が新たに發見せらるゝにあらざれば、現今に於ける巨額の金産出を維持すべきものはトランスバールを措きて他になし。トランスバールの産額は千九百十年に三億一千萬圓なりしに、千九百十一年には三億四千萬圓に増加せり。然りと雖も、粗金一噸より抽出せる純金が千九百〇三年に三十九圓七十四錢なりしに、千九百十二年の最初の九ヶ月には十四圓以下に減少せしは注目すべきことなりとす。而かも數年間は猶ほ純金抽出割合の減少の程度以上に生産費を減少することを得しを以て、粗金一噸當りの利益は却つて増加したるも、之とても千九百八年に其極度に達し、爾來一噸當りの利益は六圓六十五錢より四圓八十錢に減少せりと云ふ。若し果して然らば、金産出は將來減少するに至るならんと思はる。加之、世界に於ける金産額が減少するの徴候

あると同時に、一方に於ては貨幣用として金の需要は益々増加しつゝあり。最近數ヶ年間に多額の金は輸出品に對する支拂として南米殊に亞爾然丁國に吸收せられたり。亞爾然丁國の貿易は千九百〇三年に至りて始めて順潮となり、同年より千九百十年に至る迄に無量三億七千萬圓の金は同國に輸入せられ、紙幣消却基金として同國の兌換局に積立られたり。千九百十一年にも南米の金輸入は減少せざりしを以て、同方面に於ける金の需要は今後猶ほ數年間持續すべしと思はる。又、直接に或は埃及を経て印度に輸入せられたる金も尠からずして、二三の州に於ては既に金は一般に流通せるもの、如く、且つ到る處に於て富豪は銀の代りに金を蓄藏しつゝあり。若し印度に於ける金貨自由鑄造開始の運動にして成功せば、巨額の金が歐米の市場より吸收せらるゝに至るべきは疑ふこと能はざる所なり。要するに、『世界各國は』「頑迷なる東洋」す

らも亦——金貨本位を採用せんとしてあり。支那も現今の騒動が鎮定したる曉にはサー・ロバート・ハートの提言を採用して、日本の先例に倣ふならんと思はる。

若し十九世紀の初期以來の卸相場の騰落を通觀せば、千八百九十六年に至る迄の物價騰落の趨勢は慥かに下落の方向を有したるを知るべし。激しき波動はありたれども、物價平準は一八四九——五一年前は下落の大勢を持し、夫れより千八百五十七年に至る間は騰貴し、爾後千八百七十一年迄は千八百五十七年の平準を維持したりき。千八百七十一年より七十三年迄は物價は再び騰貴し、其時より以後千八百九十六年迄更に急激に下落せり。されば、是れに由りて觀るに、物價騰貴の趨勢が持續せられたる期間は下落の趨勢が持續せられたる期間よりも遙かに短し。現今に於ける金の産額及び將來に於ける金需要額の見越に關して上文に述べたる事實を

日本經濟史料（室町時代記録の部）

松本彦次郎

綜合して考ふるに、輒近の物價騰貴も亦是迄の物價騰落の順序に對する例外たるべきものに非ざるを斷言することを得るが如し。物價が千八百五十一年——千八百五十七年間に騰貴しにる後、千八百七十一年迄は、濠洲及びカリフォルニアの金輸出が以前と略同額なりしにも拘はらず、概して同一の平準を維持したりき。されば、目下の物價騰貴も遠からずして底止し、其後暫時物價は同一の平準を維持すべきも、早晚下落の運動を繰返すに至るならん。

室町時代に關する史料の中前號に掲載せし以外のもの、中に重要なるものをあぐる事とせり、經濟史家及西洋史家は餘りに外國と我國の發展を類推しすぎて平行説の誤りに陥るもの多し我經濟史には根本史料の研究最々急務なりと信ず、
臥雲日件録。

今日存するものは其拔萃なれども最も史的價値を有するもの、一なり。著者は北禪和尚にして殊に此時代の僧侶は政治に關係すると共に一般國民とも接觸しをれば公卿の日記などの如く社會の一部に局限して公卿生活を中心とせるに對し此時代の僧侶の手になる者は政治を主とし寺院をとき更に下層の國民に及びて大凡時代精神を窺ふを得べし。本書は前號紹介の滿濟准後